里見八犬傳 第輯 卷三

へ13
709
51

遠へ門 13
709
51

南總里見八犬傳第九輯卷之三

東都　曲亭主人編次

第九十回

管領讒を容さず良臣を疑ふ
御士義を仗て大敵を俟つ

却説冗栗專作は當晩馭兵を從て五十子の城から走て城の頭人根角谷中二麗
廉の宿所へ赴く。强人媼内船虫們が首級と梟替る。夜の趣を報
る折又那美田馭蘭二も專作が反命を心のとゞく思ひ。谷中二が宿所へ來て更
闌るまで待て在。當下專作は件の両個の上職們へ悄語く。御命仰示される。柴
濱の奇談の。卑職敬金定と云ふ。その吉支甚分明。閻魔の灵驗疑ふべからず。因て
那媼内と船虫が枯首を斫て高畷へ梟て。射方の斬首二十餘級を會卸梟
替て却那强人夫婦の背へ記される罪悪を更に又牌に謄録て。舊の牌と建替る也。

○文溪堂藏

甲夜闇ければ人跡絶て。誰ゆも知られず然りけれども躬方の首級ハその數二十に餘りたるを。扛擔する人ハ多し。非除暇兵们に搭駝させるとも。そを城内へ返し入れんハ面正しからぬ所為也。然とて其頭を棄措てハ鄙語にいふ耳を塞て鈴を竊むに似たれバ。已ことを得ず石を附て遥なく海へ沈めたれバ。儀す首尾をそハで。必これある休なるべしと報るに衆皆谷中ハ含笑ながら領ぞてそろ十六分の造化なるべし。明日より又閻魔の奇特をいふものなく。ヨメかくん約莫這秘叟の美田生の方寸より輒くらちも出されたる奇々妙計なりハ。代るゆえ縦作者ハ才子でも戯子かけれバ甲非者ろくんを。究竟和尚も出来しなハ大義にて。と労へバ漫に鋏ぶ專作より馭蘭二ハなれ笑しけれ我なしでハと思ひなり。然ばいのゝ秘をとまれども。衆人ゆあく咬知りく。呆るゝもあり。謂るもヨメくの。そが中に河鯉佐太郎孝嗣もあれらのあるを待うて嗟嘆に堪ぞ。思ふやう現小人の用心ハ巧なれども反て拙く。智あるに似たるも倒に愚也。然ばいバ他们が計る所。主君の恥辱を塗隱さんとて神灵に託し。鬼責に假るぞ世の人を欺くハ是小児の戯れなるを。

知ずや列祖の冠が云言に。志士ハ溝壑に在るを忘れず。勇士ハ元を喪ふ事を忘れず。忠臣勇士の戰ひ利あらずして。敵に首を捕らるハ素より是恥るべきならず。鄙の躬方の敗北よ。略住の冠を防ぎて。君の為に命を代らるハ皆是忠義の毎ゆ。既にして冠ハ去り。及鳥卒られる躬方の首級を妻子に賜り。忠死を基吊て厚く葬らしめなバ。敷ぞれしめの死栄あるぞ。妻子も御恩を感ぞ。慰るよもなるべし。上ハ然る御沙汰もなく。佞人们が我意に儘して首級を海へ放下せしハ。その仇敵よりも惨なり。後て後の戦ひに誰か亦命を棄て。君の先途に達すあるべんや。顧ふに往日戦殁の毎ハ。その心術正しくて年来那佞人们と相対ありしものなれバ。佞人们ハその忠死を毫も憐む心なく。日頃の恨を復せしなるべし。只那強人夫婦の若見罪悪不思議に露れて。這擾乱の折にも忽地梟首せられしハ。佞人们の手を借りて那天罰を示されけん。神の威灵欲。佛の利益欲。世ハ是澆季に及ぶとも。そのちるハよきべかるぞ。それゝあるもなり最奇き。鳴呼那不良の毎ハ古人を鬼神に借るものから。その傚を

所の隱隱ふ冥冥訓おっんとっ〻恩ふ君の寵愛と患害のの是等のようを覺えあげて惶うも政の正まっ〻んを願へども又那事小よ中られんとてを怕れて默止まるべ〻況や我い年青く且その職はまっ〻ぶれい愚のこを中て徹もう薄情ろけ〻人ろ現戰世の習俗欲と嘲語がまっ〻くうち不娛て獨胷をで苦っ〻めけるあそ是後の話を小程よ五十子の城内ふ士卒漸聚まそ數百名ふ及びっふ戰栗い敵の與ふ都て施ふられっ〻ぶ有司们これふ困ど果て民の敵ふ受ふ〻外ふ目めて含復さんと思へども然っとう那大塚信乃ぶ庫の白壁よ寫っふ諭書の旨ふ違へ亦復城を屠らするのもあっんと鬼胎を抱ふて〻ふ忍岡ふ主君よ逆えあげ近に係ふの城主ふ報てきく戰栗を求めけ〻是より先ふ大石兵衛尉憲重ふ大塚ふ城の士卒们ふ五十子の城の火を兵燹へとう思ふ〻もりけぎその折迫よ煙を瞻く城下の民の失火ふ〻んと猜っ〻けれい由斷って姑且時を稼せふふ火勢煽ふふっ〻っ〻ふ例のでく消防の士卒五六十名を遣っけふそが途ふ仁田山晋五の伴當の逃て來ふ〻ふ憶ふ〻く曹ひっ〻ふ越ふ初て五十子の火災ふ敵ふ攻ふて薄子二処よ起っ〻ふ竝よ龍山縁連い大阪毛野亂智とふふ勇士ふ報れ定正主い煉馬の殘黨大山道節们ふ攻報れて戰い難義ふ及びっふ獨仁田山晋五のを逃た陸奥報れ秋その義ふ且ふ〻ねども那里の凶変ふ〻ぶ大石の士卒们い駭く工大〻ふ形ら〻ぶ〻んふ這小勢ふを今ふ〻那処へ赴ふ石を抱ふて淵ふ莅ふ薪を馱ふを火ふ近つふ〻ふ危ふ所為ふ〻べ〻皆共侶ふ立かふ縁由を訴て又左も右もをべけれを大家踵を旋ふて大塚ふかふ走ふ件のふを報っかぶ憲重憲儀いべ〻ふ城内の士卒驚噪ぶを加勢を五十子まふ〻ふを〻べと相罵ふて出陣の准備を做を程ふ仁田山晋五の伴當ふ痛を肩ふて後れっめと五十子の城兵の當処ふ由縁あふの〻漸々ふ脱れ來て定正主を恙ふく忍岡の城を投て走ふのふ〻ふ支の趣及五十子の城い敵の大將大塚信乃成孝と喚做を猛者ふ攻陷されて過半灰燼ふふっ〻ふ信乃い一霎時も留らぶ倉廩ふ戰

粟と飽まで民ふ分食〜〜て。道節毛野們の隊兵と一隊ふ〜て。往方を知ず退く折ふ高畷迄。仁田山晋五を誅戮せられその餘城方の首二十餘級。皆濱表へ梟られ〜とのふ支詳ま聞えず。その後又来ぬるめが鮮目前の自殺の事。河鯉守如親子ぬるまで這那と報〜ぶ憲重色を失ひて。衢ふい那里の遠烱と。民の失火と思ひ做して加勢遅滞ふ及び去れかくも不覚られ五十子の敵退くとも。那里を戍る士卒ふ〜後の薪料かとろとぬく城番の隊兵を遣せべ〜と下知する程ふ又五十子より来ぬるのあり。五十子の城内ふ残兵既ふ立ち〜る事。俱ふ四門を戍るめ。三三百名ありとふ。徒れどその義も亦支後れ。とて面目ふ〜けり。その故ふ憲重ふ病着ありと偽唱て日を経ぬるまで出仕せず。次の日忍岡へ使者をそ定正の恙なきを祝し。且蟹目前の悼を演て。悄々地ま定正の左右侍臣们ま東西を餽り。幇助を求めて。やう〜く毒を〜ぬ〜かば今戦栗の催促を倒ま欺ひて。往日の衍を補ふ。よりぬ〜られどそ求められる數よりもまく戦栗を運送して。五十子の城へ入れふけり。然ど這

回の怠慢ふ。獨憲重のみ〜ぬ〜ど石濱赤塚の城迄も。藻塩火を〜めと相錯て。援兵を出さでやーと。後悔の折五十子より。戦栗の徴あり〜ぶ異説ふ及ぶ齊し。その備ふ充て。けり。是ふより谷中二们ふ木の工匠とヨヲく聚合て城の修復とを急ぐ。城隷の民毎ぶ敵より米銭と受ぶ。ぶ酢く思ひ〜ぶ飽まで課役を被く。責使ふと苛刻。更ふ臨時の租税と命じ。今債ぶ亦ヨヲ。ふの故ふ荘客们ふよく信乃が仁心を。追慕ぬ。とふ〜ぶ。谷中二ぶ刻薄ぶと最恨〜く思へど。却あるべよあ〜ぶれば夜ふ日と多く驅使れて。修復の役を果〜けり。尓程ま定正ふ二月下旬ふ忍岡より。五十子へ帰城し。谷中二取蘭二。その次々まで。有司の功を賞め禄を増て。逃るのを貶〜ぶ。又犬山道節们ぶ。隠宅を知るりのあ〜ぶ。悄々地ふ許ふ。とそ。百貫文の賞銭を機く。那這へ徇示せ〜ぶ。信乃ぶ徳と。義ふ感ぶる民ふ〜〜官府を。假りそ已ぶ利を欲ぶる。残忍亜頼の破落戸。道節们ぶ在る地方を。実ふ知るよ〜ぶ。久〜ぶ云云と告

文錄堂藏

許されのなかりけり。係て又定正ハ。河鯉佐太郎孝嗣が。功を思ひ才を愛て。親の喪の居ることを許さず。幾日もあらで召出して近習に做して使れける。孝嗣も亦恩を感して日夜の勤労数ふるに遑なく。最正首に仕へしを。初縁連と同意したる奸黨ハ。欽ずも縁連の殺されしハ他が親守如が。鮮目前を誘稟して。犬阪毛野の手を借りたりと。那密計を略知りて。いよいよ快らず思ひしかバ。謀ド合し言を設けて。折に觸ては孝嗣を讒言するもの多かりしを。定正ハ物流して。一霎時ハ掛念せざりしも。讒諂既に度重なりしかバ。那衆口ハ金を鑠し。市に三虎を致れとかや。唐山人の譬言喩に漏れず。定正竟に疑ひて。孝嗣を忌むこころあり。程なく外様へ退けて。寵辱を等く地を易る。孝嗣も亦その意を猜して怕れて病痾に假托けて。久しく出仕せざりしを。奸黨ハ[illegible]として。管主を唆誘し。讒誣奸臣と引なる。けり。ある故に定正ハ孝嗣が罪の虚実を有司に命して召問せずやと思ふめるに。らのち比危窮を救ひし軍功あるに。今證據もなき罪を糾して情なき沙汰せんもあるべからずと思へども。いまだ思ひ難しに。

卿ハ犬山道節が箭嚮を瞳る天窓ハ愈しかど。是より頭痛屡發りて。堪がたき日のおほかりければ。その療養に拘らひて。孝嗣が古叉の虚実を糾すに遑なかりけり。休題再説。道節即信乃。荘介小文吾現八大角ハ。犬阪毛野を伴ふて。有種并に数十個の隊兵と共侶に流に從ひ船を漕旨して。二十二日の暁天に千住河に来りければ。咸馬頭上より陸に上りて穂北を投て急ぐなり。然ハ又落鮎有種が岳父なりける氷垣残三夏行ハ。御曹司猛可に有種が土兵を駆催して道節が大義の郡巾助に船を柴浦へ出せし。折その支の趣を告げ。僭做まで送りしの名ければ。只ハ山崖略を倭々と耳にして出て来しを心のとなく思ふのを推禁んいさはが童戸と倶に其頭の者どもにそろく不娯て一旦もユ夫に消せしに其宵一個の雑兵が躬方の刀瘡児七八名を快船にうち乗て漕しておりければ越に初て道節が勝軍の事の顛末犬阪毛野が復讐言るるさへ具に略知りて。その欣びハいふべくもあらず。刀瘡児等ハ薬を與へ。更に竹便にうち乗して各宿所に送遣し。却勝軍を賀びの酒肉を悄々坤に准備して。道節們を待程に。七犬士も有種們と四

更の左側よりかの来ふければ百及ばの重戸と倶ふ客房ふ迎入れて勝利の祝びと演るのを更闌たれば意表と盡さば昆布搗栗打鮑と餚ゆそ不要と薦めるどもの折も野荘介少文吾八夏約と重戸も初對面の口状あり詩々ければ畧ぼて寫まば幾十個の隊兵们ハ松ゆ飽まぐものの東西賜りる明日見参ふ八ぞ別とて門より辞して退ふけり左右まる程ふ五更の鐘迫ふ吹ぞて家鶏も數鳴比ふ多各々疲労ふれば信乃道郎ハ現八角们と共侶ふ盃と辞し席と去りそ毛野荘介小文五ふ案内をして儲の臥房ふ入りそ枕ふ就ぬけり却説その次の朝毎よりも遅ろける旦飯も果ー比主の翁夏約ハ有種と共侶ふ七大士の宴不ゆを尋て昨日の戰ひその圖ふ當りそ武畧男戰の光景と有種ふ听ろとて連のふ稱賛ぞりーと道節ハ推禁めそ不その賞美ハ分ふ過ぞろ約莫這回の復讐ハ落點生の幇助ふ多く隊兵を引れびそ諸兄弟と共侶ふ粉骨と盡ー礼恨る所ハ定正と殺ゆ漏ーしけれども敵と斫ること數百名郎方ハ一個も戰殁ぞる亦翁の洪福ゆそ我们ど幸ひ那人疫児八名ハ窮所よあーぞと考えて心と屬てあひねかー只那八人のみぞ。

今番の大義を資ーれる軍功の人々ふ幸必物せまほーけれども人ーく浮浪の身ふあれば何ぞろふ儘ーくふの因て大塚们と商量ぞろとのひつ准備の金一裏ハ倉ゆそ扇ふうち載くられハ是軍用の與ふ年来腰ふぞるをヨりく路費ふ做ーたるの餘ハ鄙ふ里見殿より賜りる金ぞるのをそハ今番差我兄弟六名ふ配分せん徒れば我貯禄ハ只這微小の外ぞ薄義を嫌ひぬ那人々ふ贈らるべ。

遽ち子ぞ夏約ハ少も沼果び推戻ーそ云ひ又思ひ付る隊知られまりーどく扇谷の管領ハ有種が與ゆも亦先君の寛家ゆ又那嘉吉の兵乱より在下も亦舊怨ぞる。

我身ハ老體ふ女壻有種が單身ゆそ車と砕く東海公の帮封と求る才るければ復讐言の大望ハ企及ーかーとのを思ひ絶てけり粮ぞも諸英雄の驥尾ふ附る今番の大義ハ素より人の與るこび且我下る荘客们ハ皆是豊嶋の舊卒ゆそ那田横が五百個の従類ふてゆ及ぎるゆ今番の役を相懽びて皆舊処ゆ雪ん。

廃幾る兵毎ゆれば賜るとゆ。

○東京堂蔵

○東京堂蔵

重賞を受べきや。恩賞の趣は在下異日侍へ示さん。その義を許させ給へ。と推辞めば又有種も道
節にうち對ひて目今家翁の意示せしごとく最悍なる言ながら諸君子は一所不住の客遊なるをさ
れば路費に餘財ありとても人に施す折もあるぞ。とらずを道節が果は道理は宜乎然ることなれども。
入各志ある贈りてこれを受られず古川へも棄ん淵へも沈めん功あるものを賞せば何をもて復人を
使んや古の義士勇夫は刎頸断金の交りある今客遊の折とて路費の多少をいふべきと論ずる
聲の憶ぜも高らかなるまで焦燥ければ信乃大角們は傍より推禁めて夏行と有種にうち對ひて
我們も亦大山と同意なるを勿論なれ願ふは枉て受納へ推辞むは要なきことなるべし。と諭せば現八小文
吾も毛野荘介も共侶に詞を加て果しなき義俠に服する夏行有種且感し且謝して恭なから
ん然らば力及ばず他們に侍へりんと応て金を受なる登時信乃と道節は又夏行にうち對ひて我們
這里に逗留せば告訴するあるべしとも五十子へ程遠からぬぞそれよりも尚不近なる忍岡も敵
城を竟に那里へ寄せせん先度の恥を雪んとて大軍推寄来るとあらば何をもてよく防ぐべき。

そも我們は覚期のうへなれば怕れていふにはあらねども翁一家を連係まで二十餘年の経営を空するを
をしんは惜むべきことなれ。然れば我們七名の者は結城に赴きて四月の好事を果さんと欲す。その故は箇様
箇様々々のよしありとて大法師は甲斐を立去り獨結城に赴きて里見殿の所與なる先亡
嘉吉の諸霊魂を吊んとのよしなりと詳に解示して侍る約束あるなれば我們は那地に
赴きて大法師の旅宿を尋ね結城の城下に歇店を求めて法會の折を竢んと思ふなるを
連係まることなく我們も後安からんべし因て別を告るなる両三日の旅ながら今より首途せんずれ
とあるを夏行有種もその義はさることながら結城氏朝ぞも成氏方なれ宇津宮は山内管領
定道の方人なれば結城に在ることも後難あらんと決めかたらん且義郷は他人を離たる開發の
始より皆腹心の者なれば這里に潜びて在るとも決して敵に聞ゆることなし縦外より洩
ろ聞えて大軍推寄来る折諸君子這里に在さずとも我們必免るべければ願ふは四月の時
候までも長閑に杖を駐め給へかし數ならねども在下は結城の籠城の殘黨の諸君子と共侶に

ハるぞ那地に赴きて件の好事に會すべく欲するのみぞと諄く云ば有種も亦詞を盡して倶に禁めて已ざりしを荘介も倶にうち听て信乃と道節にうち對ひて喃大山主犬塚主二翁の意見も理あり我們這里を退きて後ま大敵推寄来ばその身を脱れて禍を人に貽に废らぬ義を元てせざるハ勇なる人の權且這里に日を弥せ敵の動静を覘ふて推寄来ざらばその折に結城へ赴くとも遅からぬべからぞ那議に任しぬのみぞかしと詞徐に解論せば現八大角毛野小文吾も実に然なりと領きけり是により信乃道節ハ要なく衆議に従ひて敵を等て防戦ふ古文の計議に及びしかバ主人夏引有種ハ歓びて諸大士の籌策を折まく當下信乃が云やう這荘院ハ退地なれど敵を防ぐに妙ならねども前に一條の小川あり後ハ都て水田なり且左右の路陝ければ寄勢といへども推並て稠入ることハ克ふべからず箭種もよく准備して思ひの随に射て仕進退ハ又時宜によるべし隊躬方の荘客們に謀し合して吉文あらん折皆自焼して這荘院を盾籠るぞそよかれとのみに荘介らも領きてその議宝定に緊要なるべし異日寄隊の大将ハ持資親子を除くの外本事ハ昨日よく知りぬ中一中て扱ひ方へ退くとも易かるべしといへば道節眼を睁りて否退くことあらん。持資親子が出て來ば願ふ所の敵なり百騎が一騎となるまでも鏖果さずして何処へ這奴もら舊き怨ハあるをと敢閫猛く論ずるを大角徐にうち笑て然る宜しぞ犬山主我們ハ未生より里見殿に宿因ありて徴に應ずる身なるをそを忘れて狄又ら小那大敵を鏖さんとて身の危きを思はざるハ匹夫の勇といふべくのみと諭せば現八小文吾も大角が議を是とし稱へて又云云と論ずるを毛野ハ些ら含笑て諸兄弟の討論ハ皆その趣ありといへども敵の推寄来ぬるや否らまだその機を知ずして我進退を論するハ抑亦早からずや今愚意をもて料らんに忍岡と五十子へハ間諜児を遣して敵の動静を少知らバ便宜をとらすことよからんその餘ハ目今要なしといふに大家有理と応て然らバ明日より間諜児を日毎に那里へ遣しつべしといふを夏引うち听て在下と有種ありけれ件の三个所へ遣すべき世智伶小才二あるべし他們ハ這里の夏に熟しつるものぞその義を命ぜんとのみと向ひて現八大角ハ憶もらち笑て現那二人ハ世才あり必行心あるべからずといふに大家再議に及びて商議既に決りけり。

なせるのみ夏行は世智介と小才二は件の機密を耳語示して。鯽魚鰻鱺野菜なンどを擔賣る小經
紀児は件の二僕を打扮して是より日毎に五十子と忍岡へ遣しつ城の動静を捞らせけり是に
那根角谷中二と美田駄蘭二が計ひて躬方の首級の梟替に媼内船虫を梟首なさしめ又
管領定正は忍岡の城に在り道節に射られし箭前响の故なる欽折々頭痛に堪ずとて醫療の
屬を過さず又道節信乃毛野們が在処を索ねよとて那這へ下知せられしが又五十子の城修復の
ぞ。漸々に竣えしかば七犬士們は冷笑ひて。なうらん事は速に攻撃すべきに勢ひにわらざれども倘我
亭と人に知られなば後の変故料りがたし只小心になくてはとて遠く謀り深く潜みて徐に光陰の過
るを等けり。爾程に鄒向は道節信乃に従ひて倶に舊怨を雪める這穂北なる荘客們は今番
道節が合戦のせし一百金を配分せられて義の為に財を惜まぬ豪傑の心操を又今更に感
激なるに傷痍なる兵毎も別に又有種が心属るもあるて費用に宜しからねば且飲び且
勇みて天晴大敵もなも來よ又花々しく戦ひして洪恩高義に報ひめとて各鏃を磨き楯を枕に

なして齋一敵を等つ程に件の八個の金瘡児們は刀瘡なごりなく痊ぬ初より們が療
一個の醫師あれば他郷に徹ることをせざりしかも道節が復讎の従卒の這地方より出るを知る
ものも絶てなかりけり。然りし程に春も夫花開馨香に三月もはや半ばも過ぬ折から五十子の風聲亦復微えて
定正主は或日に忍岡より帰城あり北條氏と和議破れ山内管領家顕定主と合體せられて
長尾景春も和順せりされば佞人なにヨヌされば持資親子を拒ぞ面示してその計略を用ゐず。
その故に持資は病着ありと唱えてのみ今もなほ相摸なる糟谷の館に屏居して稍久しく出仕
せず又那河鯉奥孝嗣も讒者の舌の剣を怕れて是も亦病痾に假托けて只忍岡の城に在るの
心の一致せぬ城内日毎に更ヨヌけれど大山主們を吟牙籤も皆う暇なくに怠るを噂も皆ござるに
たり倍れば後安かるべしと小才二が報しかば七犬士商議をしく大大徳の石禾を去て結城へとて赴き
またも偶れば既に越ぬ六十餘日を經けり来る月の法會あれば我們那地に赴きて對面せんと
勿論なれども那大敵を前にせる故に一番も音耗せず実は結城に在るを推量のみせし心の毎し。

悄々地に人を遣して安否を問ふてよろめれそく。意衣と夏約に出て相譚ひしと夏約曰て異議に及ぶ忍岡へ間諜を遣さるべきの脚力に世智介を表ふべれと真実ぞと却世智介に使ゝと夏のあるを泛さしてだ次の日結城へ起し遣るに大士いまだ一雲時世を潛べに一封の書翰に故意齎せ呉れ世智介に言ふ他事もなく恁而六七日を歴る程に世智介結城より歩つ来り因て夏約有種と共侶に大士の身邊に赴き那地の動静を報るに小可結城へ到着せ日に寺院に客店毎に甲斐の石木よりなすべく大法師の在さる様と隈もなく尋問ひし知るるの一人もなく一個の老人の誨あり這里より十町ばかり西に吉嘉と言ふ古戦場なる林原あり近曽何処より来れる一個の行僧の其頭に草の蓆を締して獨念佛して在さると他るべき様快あれて尋ねるとられしに躯て件の林原に赴きて樹間に潛に那這と相れば果して老樹の下に最も寂る草庵あり竹の柱茅の笠誓已時るれば造らぬ飾らぬ延才に六枚を布ける正面の高座あり阿弥陀如来の画幅を掛て内に一個の法

師あり香深の麻の法衣に皂色の袈裟を掛て本尊に朝ひなに連の木魚をうちなら〻して念佛を在せるに是なるべと猜しつゝ。めまぐるしくと喚ぶと数回に及ぶ応もせられぬ登時小可思ふに勤行の最中ぞ応対便なる故なるべ。夏果るまでなんぞと尋思とつゝ日の暮るまで獨鵠立てられけれども念佛の聲間断なく何時を涯りと知るようなれば怠難て又幾回狭のまろさんと喚ゝけるに菴主は龍耳児なりける狡ゆくとは知らざるに似れば彼の城下に分て歇店を求め天に明して次の日風めて立出て又那蓆に赴き菴主の勤行きの如く喚べども呼べども〻那黒の茂林深く走て耳に空く衆鳥の聲眼に見る狐鬼の足跡霏〻として零る花稀也寂莫と詰る人なしの日も獨立消せる菴主の背を見るのみ相貌年齢いかばかりけんと登りて面貌を差聞んとまぐれて隔て癡を極く心地せられて甲斐なけれど遥々脚力に立られるがゝその人とも知るようなくてらぐゝと還ぶんと。本意なく限りもいられば倘那菴主ぞ平まる〻大法師でまゝ外ぐまくも刀祢の使ようを

知らせざるべと尋思どころ又喚様て使ひ来る。大七隻より犬よくとのひ〻ぐそもの甲斐八郎庵主の終日飲む咲む念佛ゐの三日を消一ゆを共侶ゐ断食して凡夫の堪んりのうけれぐ為く思ひ絶て昨夜の歌店よかつ〻臥〻更ゐ尋思をせゐ左ても右ても甲斐ゑゐ〻を這里ゐ旅宿を累んり快立かつてゑの趣を刀祢们ゐ報まゐ〻せて後の指揮ゐ儘せんと思ひよけれぐきのゑの朝歌店と立出路次をのそぐで剛才帰着仕りぬと一五一十の長談をちぐ〻夏彩有種い応ひるのゑ沈吟くる。當下信乃ゐ那這と自餘の犬士ゐうち對ひて各々何と思ひのゑ世智介男が菴主の亘を相るとゑ〻ぐ〻とても浮世の外ゐ締ぐる。草の葺の故〻ぬゑ〻大大徳ゑゐんと思ひ半ゐ過ぎゑと問ひ莊介及ゐ文吾道節も倶ゐ黙頭て然ゑ応をせゐれぬゐ〻ひ〻疑ひゑ〻め欲をゑ犬七隻の使そどらひ知せゐい名ゐ家世智介通出来ゐうと嘆れ現ハうち含笑て件の菴主を喝ゐて絶く応をせゐれぐりゐい壁返ゑ犬村主を我訪ひゐ相似ゐ是ゑ就ても雛衣の刀自を最惜かられ。とらひて後方とゑ〻れゐ大角憶ゑ嘆息して世ゐ在俗の老翁老婆が朝々暮々ゐ家廟ゐ朝

ひて勤て看経ゑ為ゐ折ゐ竜門の薪の燃退去の鑊ゐ飯の焦んとせゐを或ゐ鼎着けゑ〻ひと喋喋く炊妾を罵るも間れゐ或ゐ猫児の鮮介を偷ゑ或ゐ慈鳥の柿菩提を破るを耳を聰く所着て慌く人を喝ぶ念佛者流ゐ皆是ゐ我一念を擲て心の弥陀を求めゑ何ゐよりて成佛せん心を真俗二道ゐ樹ても口ゐ佛名を唱ゑゐ必利益ゐると思ゐ皆是愚癡の迷ひのゑを比其るゐあゐねゐる。大大徳ゐ先亡の菩提の與ゐ石永を去て既ゐ結城ゐ到りてゐ。その投ゑ所菩提の外ゐ縦庵ゐ訪ゑ人ゐて終日喝て驚ゑとも心視聴の間ゐゐ絶て応のるゐ〻ゐ所謂維摩ゑ黙ゐん〻とも尊〻ゑと〻ゑ〻ゐ音稱賛ゐ〻ゐ〻ゐ大家有理と疑ひ解けて毛野ゐ侯局ゐ入のゐけり。姑且〻て信乃ゐ〻ゐ〻ゐ大徳の逆示ゑ為ゐ〻ゐ法會ゐ往る吉加吉元年。辛酉の夏肆月十六日。結城落城の巳心辰ゐ〻ゐ〻ゐ三月も既ゐ盡んとゑ〻ゐ法會の本日前三四日ゐ我们那地ゐ赴て件の庵主を相定めゐ支不便ゐ〻て後悔ゐ〻んといへゐ大家黙頭てその説孰も同意ゑ来月十一三の時候ゐ皆共侶ゐ首途せんとその日を遅〻と〻ゐ程ゐ主人残ゐ夏彩ゐ一路

まく汚ら京情願推辭くけれい信乃们い既ふその義を許て一路八名と定めゝ夏紡
斜るゝ歩歩び逆旅の准備どをうけ左右をる程ふ春い過ぎて夏の肇まるる隨ふ
苗頃いそぐ門田の畔ふ開く楊櫨花ふ推乃つ早晩延る自然蒔の薑より長沿の涯ら
朝のゆと忘れても疎るゝるい杜鵑青山遠く鳴亘る肆月初の九日ふ七大士们い明日未
明ふ齊一當處を起去りてゝ各く結城へ赴んとて夏紡ふも恁々と告て准備どいそぐせふいの
日下晡の左側より夏紡暴ふ病發そのめも沼いをる脚も動るぞその癘まゝく中風ぞ才ふ
氣息の暢ふのゝうち臥くる伏人事も知ゝて將水水も吭ふ下らぬい事い驚ゝうち歎ゝく枕
方ふ凭り後方ふ侍りて介抱ふ暇もあらぬ有種も是ゞ與ふ醫師を招ゝ驗者と請ふて周
公ゞ哺ゝ吐くふ似れば一家児ゝる奴婢まで甲乙と爭走まそ夜い睡るゝめもゝ七大
士们ゝ寄ゝ俱ふ驚ゝ憂るのゝ恁る折ゝ捨て出てゆんいゝゝ迭代ふ病牀ふ
赴ゝて問慰め心ゝもゝく又日を過ゝて肆月十三日ふゝ信乃道節们い焦燥て自餘の

犬士と商量をる時い得ゝくまそ失ゝ易ゝ主人の病着ふ拘ゝらひて今番の法會ふ赴
ゝ後悔其首ふ達べゝ与之七ふ別を告て明日い必出去らんとそ却有種を招ゝ信乃道
節ゞ伴ける中。大法師の法會のゆ主の公羽の望ふ儘ゝて同伴の約束ありとへども爭何せん天ふ
不測の風雨ある人ふ不豫の病患ある公羽の病癘一朝ふ癒ゝ難ゝ捨ゝ今ゝ捨ゝふ難ゝ捨て
別を告ゝい本意ゝねども我们醫師ふあゝられば這里ふ在ゝても亦益ゝ明日未明より啓行
まそ連ゝふ路次と急ゝ各ゝ必那期ふ遇ゝ分ゝの義を許容ゝれゝとゝられて有種困ゝた様
頭ゝ傾け沈吟ゝて示教の趣至極せり親ゝ願ゝ今番の同伴その期ふ及ゝて憶ゝ行く病
著ふゝ果ゝ是ゝ本意ゝ無ゝ本意ゝくいん在下親の名代ふ立ゝ行く思へども如何ゝ大病
ゝるゝゝ是ゝ如何ゝ儘ゝ伴當ゝ明日首途をゝ急ゝ馬ゝ輪ゝ乘ら
せゝ各の義ふ障ゝいゝ現ゝ大角も小文五郎莊介毛野と俱ふ月来止宿の鈴ゝ吁寧ふ
演別を告て目今出立ふ樵られる伴當ゝ願ゝ大塚大山も恁るべ我们い身を

浮萍の旅より旅にあるものから東西南北せざるところなく。皆不自由に熟るゝものから、愁を愁に伴當あらず。反て路次の煩ひなんあの侭放ち遣られんぞ、そを倒に幸ひなれと推辞は信乃と道節なり。又有種なり對ひて。諸兄弟の宜所是我們が真面目那外物を飾るは要なし。扇谷の寄隊その沙汰絶て後安にかられども今番は特更微行へ這七人ぞ事足れりといふちに措しぬべしと推辞を有種強がるを欲らくハ今宵送別の盃をまゐらすべし。大大德へ布施物の一裹を寄せならんとの義ならぬハ許させ給ひねとて犬士們を不聴なれど好意を悖るも無礼なり、主の翁の病厄なく恙きまらしを祈るれ繼盃を賜るも何樂しくて受ざるべき。然れば盃酒も亦要なし。且、大法師は石禾もて姑且葬縁の折から一錢の外受ざるべし。今番の法會は他の施主を仰がんとぞ聞えたれ東西顔ら起も亦益なし。願ふ所は主の翁の醫薬看病由断なく孝養を盡しぬべくなれは優る功德はあらじと迭代りに語を續けて心も對の理義潔白なるべらかるにぞ有種は感涙の枕むと覺ぼ沈吟しつゝなかなくその意に従ひけり。然れども夕饌は毎よりも心を用ひき。

聊中酒の款待あり。童戸も奥より出て来て父夏行が大病ぞ法會詣の情願を約果ざるに便なき云云と繰返も倭文の苧環繞一繞曲なく浮る不和も折るけれ犬士們は程なく辞まし欲びを演らし別を告るの室肚裏にも夏行を俱しよる路も像のごとく中風暴に發りなぞ。倶に難義の旅宿を果ぬて法會に後るとてもあらんぞその折なら只切てもの幸ひなりと思ひたり。既にして夕饌果ても有種はなを侍りて只管別を惜をけり。然而その詰朝有種は七犬士を御盡処まで送らんと豫ハ思ひなりけり。暁天よりして夏行の病着危窮に及びしかば身邊を離るゝことを得ず。七犬士も亦その機を猜して重て別を告るに及ばずと遽しく出てゆきしを世智介と小才二は喘々趕て来て路二三十町送りつ告別して還る折、東あらみて在暁の月は遠山の峡に入りにけり。畢竟七個の犬士們が結城の法會に赴きて後の話説甚麼ぞや。分教あり。狗児佛性趙州曾識相接犬牙先獨突然下まろうなく、霧路のめぐみに生立て、ひとはきづかざるらぬたての花這詞詞の意を知まく欲せば下の回より後々まで解分るを聴ねかし。

第九十七回

良将征せぎ〜〜地と二總ゐ廣くを
兇賊心ろく〜〜く自積惡を訴ふ

話表安房上総二州の守里見治部大輔源義實朝臣ハ往る長禄二年の秋伏姫富山ゐ自殺の折大〜〜ゑ〜〜ゐ奇瑞あり且金碗大輔孝德入道、大坊ゐ當時ハ方〜〜飛去る那八箇の明玉の往方をいりぐ索んとそ忽地行脚の錫を鳴ら〜〜そ飄然とそ辭去りゝ他が安危ゆ心ゆとるく然つゝでも亦賢を招ゐ士を徵ん與ゑとそ蜑崎十一郎照文をその投き方へ遣せゝゐ稍久〜く信もゐゐ此ゑの比よりそ義実主ハ隱遁の情願あり諸臣の諫めを用ひゐで有一日杉倉木曲日介氏元堀内藏人貞行を首として有功の老毎を送もるく召聚合てみづから諭ゝ玉ふ汝達日者我隱遁を妨べらゐとく諫めくるその言理のありとへども爭何せん鄉高あい我一言の失よりゝ伏姫と八房の犬児ゐ伴せそ心ゐ羞るエヨヌろ京ゝゐる伏姫い羞月花の閨秀ゐれども賢才義勇い親恥ゐゐ男子魂あれバそ親の與れ一言の信を切ゐ失ハど

とく那畜生と伴侶とゝく深山ゑ光陰を弥りゝゐ幸ひゝゝ身を汚されぎ思ひ切ゐ孝德が飛丸の與ゑ八房と俱ゑ命を隕しゝるその折念珠の灵驗あり且伏姫が今般ゑ送せゝ言の葉虛しかゝぎもあゝば那塞翁が馬ゐ似て禍鬼反て我児孫们の福ゑ早ゐ爰ゑ〜〜ゐ祥欲知ゝねども椿樗の八千歳とも祝ゝ一個の愛女と非命ゑ死せゝのゝ妻五十子もまゝとゝ夜の鶴の腸断離れて同月日ゐ黄泉ゑ赴沈文照文が父蜑崎照武ハ愁ゑ姫を赶んとして身を谷川の水屑とるゝゝ是さへ不便のるるゝゐ又金碗大輔孝德ハ不測の辜を釀せゝゝゑ我まゝ赦ゑとを沒ぎ數るつべゝりける頭顱ゐ摭く。頭髮を前刃ゐ拂ひゝ不二法門ゑ入せゝゝ遂ゐ後ゐ人とりそ他が親八郎高吉が我を帮助て甚高ゝゝ功ゐ報ゐゐ由るくゐりゐ祫と云恰とゐ皆義実が疎忽の失かくの如くゐ至れるを言ハ阿容々々と世ゐ立ば後世議論定りそ軍記野無ゑ寫もゐゝば識者ゐ凡を彈れく心を恥を知ぎとゐれゝゝんや汝達ゝるも義成が災回とるく悲ゝを請ふく隱遁の

義を禁めかゞる用ひざりしに倦る故之願よい汝達明日よりして義成に仕へ日の
ど如くその足ざるを補ひて臣たる道を盡されるべ四境に多く無異よして我身も後安ら度べ
あの義とちろ弱よかゝといと叮寧に示しのくい氏元貞幼以下の老黨言の道理に逼ら
れて皆感涙の袂を覚ず応難くるそゞ中に氏元殊く頭を擡げて謹て亶に御
諚うけたりなり然までよ思召るゝと誰ら違背仕らん只おそるゝ某们い結城没落る
先君の顧命に従ひなり本州へ御渡海の始よりして辱く家宰の列に在りとのへども
素より補佐の才学なし君御隠遁ましたるに御曹司義成をのれ後見とるべき理
なるそ願いけれとのふを義実推禁めて否とよその説に妄盲ん既に浮世を厭ひて何でふ
浮世に執念せん家督と我児に譲りるべ義実をゞその日より世に人と思ひか我ら
ろ既に決せり元具の異日に沙汰せ各々退りのへとて躯で奥に入りあの嚴命返さ
ようもあれ氏元並に貞幼们いとで本意なく思へとも然而あるべよあらざれい卒とぞろに

血衆人と齊一席を龍の間に土圭あり巳の時の頭達る老毎心おそ物思ひ眉を顰
めて退出けり是よりの後幾日もあらで家督譲りの規式あり安房の御曹司義成に
堀内蔵人貞幼を使者として造便京都将軍家足利義政へよりと告免許をうそ安房
守に任せられ房総二州の國司ち時に長禄五年己卯の秋八月伏姫の一周忌に義
実に道世の宿志と果しぬ其の歓び大々なるあの義を士民に徇示さて瀧田城
内なる西のくに閑寂の別館を造らして其首に閑居の折ゝに突然居士と自称して敢政
事をよろづ心に菩提に入るといへども思召よりやあり祝髪得度に是
島髪の優婆塞に伏姫並に孝吉们が菩提城をさく吊ひに看経唱名の暇に松
風萠月を友として或に花に嘯又或に雪に眺めて情景西るべうなるとあるに
詩を賦し又歌を詠じて懽を盛にし酒を嗜ふ夫突然に安貌
既に菩提に入りるゝ突然とも弱きに出塵出離の出ふして世に超然ら所以

その処第二輯に見える伏姫自殺の明年長禄三年の話也
功臣を集めて義賢の意見を求む
堀内貞行
ゆう川はるみ

とりさま
梶倉氏元

犬ー。且突ハ穴ヲ從ひ犬ヲ從ふ。その犬を穴ヲせゝれて菩提心を發ーゝ。姫の死ヨ相從ふて俱ヲ穴を沼る義之又突字と分つとれい是則ち下ハ八の犬あり。ゝを家之賣屋之是より二十餘年の後八犬士當ニ之聚合て八行とそ。その君と亮舜ヲ致ス祥あり。又然ハ月ニ從ひ犬ヲ從ひ火ヲ從ふ。火字を又分つとれゝ。便是八人之月ハ是明德之明ヲ義ゝ。犬士八人その明德を同くするの意ヲも稱う。當時ヲの義を知るものゝ。後ヲ八犬士の來るヲ及び獨毛野のそ之是を悟りそ。その妙契を感せーとそ。作者又按ずるヲ義實朝臣の卒去のそ。その歲月を誌せーのヲ異同あり。里見記及中村國香が房總志料ゆ舊記を援て長享三年是年延德元年とあり。とも四月七日又一說ヲ長祿三年八月二十二日とへるハ非なり。ゝるとも。ゝ之あい件の二說を並ゝ。借用ゝるーあり。斟酌既ヲ右の如ー。問話除煩。小程ヲ安房の里見第二世の主安房守義成朝臣ハ。その時尚弱冠なれども。文學武畧父祖ヲ劣らず。よく民を撫育して治めそ。南總の笹濱屏ゝ。是ヲ加るヨ杉倉堀内の二老臣あり。又荒川兵庫助清澄東六郎辰相と喚做もの。ハ素是里見の譜第ゝ。義實の父李子某の家臣之。嘉吉元年夏四月結城落城の折。件の清澄辰相ハ義實の迹を草ひて敵の囲を殺啓ゝ。辛く命を免れ。しかども當時義實主從の去向を知らず。ゝ。權且邊鄙ヨ迹を埋めそ本意ゝ。ゝ世を不娛ゝ程ヲ義實更ヲ安房ヲ與。ア。そ武德八州ヨ隱れゝけれ。清澄辰相怡悅ヲ勝ゝ。俱ヲ瀧田ヲ推參ゝそ宿志城許稟ゝーゝ。義實ヲ亦敬ひて留めゝ。虛實を試ゝ。素より武功の猛者毎ゝれば命ゝ毎ヲ做ゝそ。忠信ヲ亦大ゝ。ゝれば嫡子義成ヲ隷られゝ。今番氏元貞ゝと共倡ヲ專政事ヲ與ーよゝ。世々當家の家宰ゝ。そ。杉倉堀内東荒川を世ヲ里見の四家老と稱へゝ。然ば山下定包麻呂信時・安西景連ゝ亡びてより。上總の武士們皆悉義實の威風ヲ靡いて征せざれども。贄と亦則ー好を通ー臣附ーそ。その當

握ふよりげるのみ。されど邊境ゐ折々野心のあり。を義成箕裘を嗣ぐふ及びて。ひたすらに徳と脩め。他ゞ羞るを笑ひ。上總ゐ下總ゐ既ゐ半函服從ゐて。地を廣るゝ其三ヌるのあるとのく。當主安房守義成朝臣ハ安房郡稲村ゐ在城ゐて。房總の賞罰を掌り。又前治部大輔義実老公ハ平群の瀧田ゐ閑居しく。浮世のあるとろのあるを。偏り。程ゝ年を歴て。文明十年秋七月初旬ゐ蜑崎十二郎照文ゞ。犬江親兵衛の祖母妙真と。犬田小文吾の父文五兵衛と伴ふて。下総の市河より。慌しくかの村ゐ。稲村の城へ。少ゝ孝德入道、大坊ゞ行脚以来の信も知られ。又那仁義八行の王の往方も知るゝ。そゝ感得して。生ゆる。大塚信乃成孝。大飼現八信道。犬田小文吾悌順。並ゐ。犬江親兵衛仁。犬川額藏。莊介と改名せ。義任。の身ゐ。恁々の恙ある。且犬江親兵衛ゞ父ゐ。山林房八。を。曩ゐ洲崎妙垢二と相謀て。神餘長狹介の家の賊臣山下定包と。狙撃んとて。謬て長狹介光弘を犯しる。杣木朴平ゞ

孫ゐる。又古那屋文五兵衛ハ那折妙垢二。朴平と血戰ゐて。竟ゐ朴平ゐ撃ゐれる。那古七郎の弟ゐるゝも。又房八。を義侠勇敢。祖父朴平ゐ弥倍て。犬塚信乃ゞ窮阨の必死ゐ代ゐ身を殺して。仁を做しる。善報えけんその子大八。実名・真平。ゐ四才ゐ。ゐる。今茲是月その日まで。開ざりける。堂ゐ那仁字の。ヨ火玉を。握持りを。件の折ゐ。開ゐの奇特ありしゐ。又房八ゞ妻。沼蔭ハ小文吾の妹。そゝ。横死のゐさへ。少ゝ又悪棍舵九郎ゞ。妙真ゐ。懸想ゐて。その情慾と果さん。與ゐ。犬八の親兵衛を。搔攫ひ。石とのて。博殺さんとせ。折ゐ。神ヨ火忽地。雲中ゐる。件の悪棍舵九郎を。援登し。二段ゐ。列衣て。地上ゐ。軀を。投垂。茉且。大八の親兵衛を。神隱ゐ。騙しゐ。けんそゞ。仍ゐ。えぎるゝ。又信乃現八。小文吾ハ武藏ゐる。大塚の郷ゐ。赴て。犬川額藏ゐ。と告ぐべくゐる。ハ仁義八行の文字。自然ゐ。顯れゐる。ヨ火玉。感得の壯士。その外ゐ。必三名ゐるべけれ。八士。具足の折を。ゐて。共倡ゐ。徴ゐ。応ぜんとて。辭しく。大塚へ赴て。享の顛末。又照文ハ。後難の心ゐとるよりもあれ。妙真。文五兵衛。們を。相伴ふく。

慌しく帰国をるの又那許我の御所氏成の家臣と呼ばれ新織帆太夫義信乃と穿鑿の
のまでも照文詳ふ登録し稲村殿義成を以て、へ呼えあげーるが義成の主駿嘆しと聽て照文ふ對
面あり。その疑しきを尋ね足らぬると聞て果て只顧感心の外あらず姑且と宣ふ是を密そ
大殿義実の御世ふ仰付られて賢慮ふ出るよりあるを我のそ聞措くべからぬ照文いその妙筆と
文五兵衛と相具し瀧田殿義実をりふ、へまうーー上よ我先騎馬の使と馳て先ずて注進さそ長
途の疲労さをあーんを無心ぶれども快ぶなと仰ふ照文欣然と言葉を禀ーー退り出て然而文
五兵衛と妙真ふ稲村殿の仰のようを箇様々々と偽示し俱と瀧田へ赴けり。小程ふ義
実朝臣い稲村殿の使者の注進を聞ゆふ蜑崎照文が帰国の趣、大法師い差もあらで
拝藪行脚ふ他支ぶるの並ふ信乃現八小文吾親兵衛額蔵五犬士の事の顛末その餘文
五兵衛妙真房八沼藺们がのまでも今番照文がもあーせる書冊ふ載てひとくそをーも
晋呈しければ義実感悦浅らぬ近習ふ讀ーー聽果て照文を等ゆふ程ふ蜑崎十二郎照

文八文五兵衛妙真们を相具し瀧田の城ふ来着の日義実朝臣ふ見参ふ登時義実い
先照文を召よせくその勤功を労ひて那明王のの犬士们のの既ふ聞召れる幽冥の不可思
議鬼神の出没有と雖ども則有り無と雖ども則無ーーをもくく聖人ハ怪力乱神を語
ずゆのも況凡夫の臆断りて辨ふべ能ふあらねども那八顆の明王い伏姫が仙ーー時役行
者の冥助を蒙り不思議ふ効る念珠ふあれば他が生涯身ふ放さそ深信怠りなく
素ふその看数の大玉ふ初い如是畜生発菩提心と呼ふ八字あり後い変じて仁義礼
智忠信孝悌と呼ふ八箇の文字ふ做見れい素よりヨ犬物くるふ似ども然が那八房ハ犬の
最期ふ及びて菩提心を発せーと又那大塚大飼大田大江の毎歳名欲各大を氏とも
各那身ふある痣のその形牡丹ふ似るもその明王を感得し出生時を同くもるも又是奇
中の大奇ふーーその犬士い信乃们と共ふかるーーべ是八人あるべ玉の因縁その人を以て舊返
れる所以ある狭遮莫伏姫が終焉の折忽然と光明を発ち散亡る玉の往方を求

んこゝに最做しかゝる所約束なんと宿望虚しかゝぞして玉と人とを沒くりしゐ孝德入道、
大坊が道心年来堅固なる一念竟に幽冥に通じゝるゆゑぞあらんぞ是併照文が勤
功も亦尠からぬを惜しいふ相見る所の二大士を伴ふてかゝるあらぶるの尤遺憾の至り
然るゆゑも那大八の大江親兵衛仁と安房に尚四歳の小児ゆゑ神隱に遇ひと欲存亡心ぞ
なるにもかゝわらず他们い凡人ゆゑに各感ずる所あり。その宿因の故をもて生出さるゆゑんぞ
縱窮阨ありとても又神佛の冥助よりて必恙あるべきに天縁熟する時至らば件の八
士具足しく當家股肱の臣となるべん欲就て照文が俱して来る大田小文五吾の父文五兵
衛犬江親兵衛が祖母妙真们のゆゑも照文が具書によりて既にゆゑのあらを沒くり俱に當
城に留置て扶持して老を頤せん両三日疲労もあるべし權且照文に預け置て宿所に伴ひ
勦りて異日見参に入れよかしと懇切に宣ひて休息の暇をあたへ稲村よりまかりいでられ
たる使者ゆゑも件のよりを示しく。文五兵衛妙真们を宜く扶持しまゐらべと義成に稟べし

とて隨便還しぬけりその後文五兵衛妙真い義実朝臣に見参して懇切なる仰を蒙
り又稲村の當主義成朝臣よりも當城の有司に命じ他们が宿所を修理せ奴婢さ
隷て不自由なく恩貺那身に餘くるその支の趣い載て第四十回四十一回に具なれば
ゆゑ都て畧記しる看官前後を照して知るべし。徒而その年十月の秋有一日稲村より義
成の龍田の城へ來ませ折照文並に文五兵衛と妙真を召出して慰めゆゑと大々さるべき東
の西のどヨヲく賜りければ義実老侯歡びのあまり義成主と高量あり。ゆゑに那大塚信乃大
飼現八犬田小文五吾们が外に犬川額藏と喚做まゐあらそゝる那明玉八顆の内中なる義
字ある所持ゆゑれば犬江親兵衛と共に五名必宿因あるべしと思ふ所ありてゆゑ又お
のゆゑ実にその母ゆゑ玉の數に相稱ひて必八人あらんぞ各仁義八行の德を天地に禀
けるものゆゑあらば速に招くべきまゐ。されども他们い友に先立て祿を欲するゆゑに同因
果のゆゑ具足せば相伴ふてまゐらめとて推辞まゐらせしかれば招ぎとそも時至らば必當家

股肱となるべき天縁なるべしと思へども大塚信乃は行徳なる穢所あり。幸ひふと山林房八が身を殺して救ふなりと。申さえかねども又那犬江親兵衛は神隠の憂ひあり。それのみならず文五兵衛が偽りの説なるべし。那犬川額蔵と狡喚做せるは実の罪を免ばらきて大塚なる大石憲重の獄舎ふ在りそを刑罰の場ふて信乃現八小文吾が謀りて救ひ奪ふと追隊の士卒ふ迂逼られて皆殺を捕られしとも申え免れしとらもあらく存亡安定なるべしとそ支の虚実は知られども。その後又他が上ふ急難あるが爭何はせん。胷安らぬものをなれば復十一郎照文ふ究竟の野兵五七名を従へて重て他が往方を索ね再會せば将て来つべく。倘又固辭て従はざ他が俱ふ餘の大士を索巡りそ非常ふ備へ路費の資助ふるのみなるべし。縱路次ふて殊危あるとも防ぐ便宜ふ乏ぬべ我身隠遁せ日より。政事はちらと世の好ふとそなるべしとのを思ひかども伏姫が終ふ臨みそいへりと喝合して。瑰奇ふ出世の大士が我外孫の心地まれば必ずなるとを以ぞてなん和殿の意見甚麽ぞやと問れて義成異議ふあるべ仰寔ふその理あり。恐れなるべし児が思ふ所も御意の如き然ば又照文よりその義と命じのんとそ両侯の身邊近く照文を召よせて義成みづから箇様々々と件の支の趣と叮寧ふ教へさして帰国の後程もなく投て去向も安定なるべし。大士が索ふ遣はせ心なるふ似れども照文なるべ別人のよくもべよりあるべれば已とを以べきの義ふ及べ准備をせよとのそべ義実も亦云云と示さるの貌命あり。照文それを美なる毫も礙疑の氣色なく最正首ふ尉めて直ふ心なる旨を起行はんとそ遽く退り出て義成ふ有司ふ命じて照文ふ従ふ野兵七名と撰出さる路費並ふ大士が賜ふ金子まで照文ふ遞与さるべ小程ふ文五兵衛と妙真とを伴ふ。そ飽まで賢と愛士と徴めるべ両侯の恩と感相鈇で俱ふ願かども義実固く禁めさせて恩命をよく懇切ふ慫而蛮崎照文ふ件の野兵を従へて又八州を徧歴の首途をなるける。その次の年文明十一年春二月十五日ふ文五兵衛ふ身故りけり是なるの後照文が

信久く笑えざりしに既して四稔ふるる過る文明十三年辛丑の冬十月下旬に蜑崎十一郎照文は甲斐の石禾よりかつ来る那大士們を伴ねども十稔あまり前つ比就鳥に捉られ給へる義成の息女濱路姫と伴ひまゐらせしうと笑えーゑ稲村瀧田の両侯と諸臣女房に至るまで世ふる人の眞土よりかつ来ませし心地やまけん良歡交判くよりも喜ぶ祝壽の聲耳を盈す尓程に両侯義実・義成は照文が許の娵と聞めふ照文は近比甲斐の石禾に旅宿せ折、大法師と再會して支の趣又大山道節が大塚信乃の再厄を拯ふ及びて憶らく濱路姫の素生を知ることを況て、大法師の住持せる指月院へ倶しまゐらせるその支の始末を姫の養父四六城木工作が當年恁々の地方に濱路姫を拯奪て年来養育ふ及木工作が枉死のち並ふその妻夏引が甲斐の國司武田信昌の家臣泡雪奈四郎が夏引と女婿通のち濱路姫と犬塚信乃を害せんと謀りしるその支の終りまで照文が直に処具ふ[illegible]有徳ふ奈四郎夏引們が奸悪竟ふ發覺れて夏引並ふ奈四郎が悪僕懶内八首と刎られ奈四郎は又一個の悪僕媼内を倶して逐電あるに信昌の主放雁鳥のかつまふ指月院ふ立よりて、大法師は對面あるの折信乃と道節も見參ふ入りしが、その智勇と賞美のあまり留めて高禄と食せんとそ懇命大々ふ[illegible]しと信乃道節は推辞まうして當坐の徴めと免れれども那里ふ在らば城内へ招るとあべしとそ、大法師ふ別を告て猛可ふ指月院と立去る折照文も他們と共ふ濱路姫を守りて悄々地ふ帰國ふ及ぶ程ふ武蔵る四家の原ふて那泡雪奈四郎を大塚信乃が殴る捕て姫上のお與ふ木工作の怨と雪めん倶して墨田河の頭まで来ふけるに他們いる同因果の犬士大川額蔵の荘介犬田小文吾犬飼現八們ふ環り會ばその折共侶ふちあうんとて今一番も推辞まうしふよ恩賜の金子と信乃道節ふ遮与して後會を契りつ。その意ふ儘ーたりしに又那犬山道節も忠字の明玉と感得るるめふしてふ煉馬の老當黒犬山道策が家子ふあるる恁れば犬士六名ふ既ふ相識ることを況て隷させのひる野兵両三名を石禾ふ留めて。

後便の輿に倶せしが。その餘は都て姫上の乗轎子を舁せしのみ。又原かに姫上の養父なる四六城木
工作は犬塚信乃に舊縁あり。那身は奈四郎に殺されしかども。武田殿より迹を立られぬ。親族の
子を木工作が死後の養嗣にせらるゝより。既にその風聲あり。姫上不思議に差るゝ年来を歷
あかしは値遇の縁ある木工作が実に慈善の致す所。今番帰國のおん鈔びは道節信乃们
と。大法師の鄰助あるによりて這餘のおん箇様々々と道節信乃荘介小文吾現八们の
五犬士が荒芽山にて窮阨の事。姥雪与四郎音音の事。その子十條力二郎尺八の事。その妻
曳手一節の事。忠死義没の顛末を聞て随に咎えあげて證據の輿に贐しける姫上當
初被させ給ひし。篠龍胆の御花紋ある衣と犬塚信乃が撃て捕する寃家泡雪奈四郎
の首級を実撿に入れしが義実主も義成主も只顧その奇に驚きて。いとく感悦浅
からず。況姫上のおん母胞兄弟達の鋭び辟言るに物なるべし。躭て對面ありし濱路姫も
民間に人と成りぬれども。その進止鄙からず容皃も亦美しくて姉君妹君達に優るとも劣

らあへどもえあらしかバ。おん二親の鍾愛特さらにて。おとなく欵待しぬふけるにぞ。その照文の功を
褒め禄を増し且件の夥兵们も賞禄ヨヌクり信乃们六犬士の外に二人具足せが
招ぎとこも必来るべし。他们ハいまだ仕ずして當家の與に忠ある功あり。定に稀有の奇士毎
あり。とそいと多りしく思ひぬ義成の如くなれバ義実ハいとでおく一日も早く見まくほりと思召
そと切りるべし。因て昔年濱路姫の就鳥に捉られぬひし折給事の男女幾名欽その衍忍にあり。
身の暇をぬりし或ハ姫上の菩提の與に祝髪して僧と做り尼となりぬを召えして月俸を
賜る王勘なくもぞ又那四六城木工作が與にハ富山の林麓なる大山寺にて追薦の佛事ある件の
寺内に其墓碑を建て祠堂料を寄附せらる善に必善報あり悪に必悪報あり今に
えどめぬるとなるなら明君の善政漏らされ隈なく応報枯骨に及ぶとぞいはむ約莫這回に鮮く処れ
第五輯四十回より第七輯七十二回に至るまで寫著したるなれば看官兼知のことなれバ今
又安房の事に及びて再せざることとなせり。その故に初に略せしを後に具なることもあり初に具に寫せ

文溪堂藏

あい茲ふ畧せるゆもヨヌろ看官知まるゆるれば。とて那大士们の顛末を里見殿父子知ゆあ
ぎ是より後ふ不便ゑ作者の用意と思惟るべ。間話除般糸低而ゑ次の年 文明十四年 冬十
二月の某の日ふ御高ふ蜑崎照文が甲非文の石木の指月院ま留め置る夥兵们がかの来て
、大法師の消息を照文ふ遞与ー。且武蔵の穂北ゑ氷垣夏紀許寓居せる大塚信乃
大山道節が口狀を演傳へ。照文はそのあるを聞て、大の書翰を閲するふ犬川荘介は犬
田小文吾と伴ひて。翌日指月院ふかの来まけるが同因果の一犬士大阪毛野胤智の往方を
尋ゆ索んとそ。俱ふ信濃路へ赴ゆ。并ま大飼現八ゑ又是同因果の一犬士大村大角礼儀
との翌日武蔵の穂北より。指月院ま来て止宿のゆ又信乃道節ハ穂北の郷士氷垣夏紀ふ
留められて。權且那里ま寓居のゆ又毛野が石濱の復讐言大角が壁返の妖怪對治又小文
吾が越後ま暴牛と推駐めゆ。並ふ賊婦毒虫のゆかるが折ま荘介が強盗酒顛二们を
誅戮のゆ。并ふ長尾景春の奴々籠の大刀自その臣稲戸由充のゆ小千谷の狭道石亀

屋次郎大のゆまでも。その崖略と寫裏て。件の毛野ハ素生恁々感得ゑ家智字の
玉あゆ。又大角ハ出処恁々ゑゆ礼字の玉と持り。那身の内ふ痣あゆて。形狀牡丹ふ似ゆると八
人都て異ゆ。但その有る処同じかゆざるのゑ。佳れハ玉の数ふ稱ひ。犬士八人具足ぜりそ中ふ
親兵衛の存亡いまゞ知るふ由ゆ。毛野ゆ往方も詳ゆ。その人あゆてその人足らねど天機ゆ
ゆく圓圓ぜ全取らんと遠ゆ。拙僧本院ふ住持のゆふ実ふ已と。ゆゑ素
より久恋の地ふ。よの故ふ来ん春ハ本院と辭一去て下野州結城ふ赴ん姑且那地ふ
庵と締じて。先君義実の父・義成・義実・義基・並ふ吉茹吉ふ陣歿の諸ゆ大魂の菩提の與ふ大念佛を修
行まべ。結願ハゆるト年の四月十五六日ふハ必ず幸ひ。その時候ふ犬士们一緒ふ聚り
八人具足ゆるとあらば。俱ーて故郷ま欲ゆ是ものゑと。両殿ふ言ーゆとあられば賜
文紙ゆらば。欲じて次の日先ゆの狀と。義実朝臣ふ披露ーて。ゆと。少ゑあらばゆが義実感悦ふ
べゆもあらば。件の書翰と合ゆ抗て。繰返々々閲ーゆと半晌許讀果て宣ふゆ。吉茹吉ふ結

城落城して先君戰殺ませしより今に至りて四十二年我一日も忘れしことなし。いざ那里へか墓碑を建まくほう思ひしかども。その間に敵地あるて人馬の通達自由ならぬ。且京都將軍へ憚るよしもなきにあらねば思ひとるべくふ年居ヨ親の神灵を慰るエーもあらで過せしかど今番大が發願ハ我が代まる孝順の誠心てそいと有々さけれ且那八箇の犬王の往方を竟ふ素知てそその王ふ因て生ぜる犬士の數も亦八人いまぐ三人を為ぞといへども。その人あるを知るとい獨ゝ大ゞ功徳ありまるち。壁言が千體の偈を為ぞ。七堂伽藍を建立の開山の祖師ふまりんよりいと做ーぐこと所行ぞ。但心とるべハ明年四月の中氣すでふ犬江親兵衛犬阪毛野ぐ往方を知るようあるべ。毛野ハ生て來もせんの。那親兵衛ハ四歳の時神隱ふ遇ひぬと。ゆけば既ふ五稔の光陰と經ぬ。倘存命ハ明年ハ九才ふてそ。ぬべれ是ものよりと妙真ふ傳知ゝて慰めよ。明年の四月ふ結城へ我代香ふ照文を遣さんそ。ぬる程あるふ。稲村へハ照文まあるて、大ゞ書翰を披露ーね。義成もさぞ本意ぬ。ふの它のすハ箇樣々々と叮寧ふ命じぬ。更ふ

又有司ふ命して今番甲斐よりかへ來ぬる照文ぐ賜兵们ふ東西を賜ふと初のごく君恩微賤も漏されぬ。ぞ傳へ守くめぐふもいと辱く思ひけり。話分両頭這年間上總州夷灣郡館山の城主ふ草蜜田權頭素赤藤と喚做くめのあるそぐ素生と原るふ親ハ近江の膽吹山ぬ強人の頭領ふそ但鳥跖六業因と喚れる殘忍鴟梟の暴雄へ武芸剽姚穿牢命の術ふそ素より得ぬる所ぬ往る正長永享よりぬ嘉吉の年ふ至るまで京鎌倉ふ兵乱絶ぬ足利の武威衰へて諸侯割居の折れハ業因ハ類とめそ。聚合ー小嘍囉ヨくあ。膽吹山ふ躯住て折々幾内と横行ぬれども。その出没と人ふ知せぬ或とハ寺院と力脅ー又あく時ハ豪民を殘害ーて其財を奪ふと幾千百ぬると知ぬ。浮る雲の富ふ去れる業因ぬ慢ふ。べくもあらぬ一碗の美酒の與ふ海錯野味と列ねても尚飽ぬとのこ思ひぬ因て其悪黨の狡りの蔭でらまう人の胎内の赤子と言ひて酒の餚ふ做そとハ。その味ひ登里ぬ嘗ーめと哄誘せ去ふ業因これをうち听て素殘忍心の癖ぬれハ然るとまくんと思ふふぞ小嘍囉ふ吩咐て孕ふ

婦と奪合ふ〳〵生ながらその腹を裂て胎内の子を蒸て啖ひ炙らも煮て酒菜ふせーふ。味ひ口ふ稱ひふければ是よりして民間ふ懐胎の婦と索さて掠奪ふ殺さる那唐山の盗跖が兇暴ふも過されば這事竟ふ世ふ聳えて膽吹山の鬼跖ふとそ人々他を怕ることを疫鬼ふ異ふ〳〵恐慌ふ徳る積悪の報ころけん有年の六月中流ふ業因ふ京師ふ祇園會を欲ぶとて事熟こる小嘍囉三四名を従へて各々形體を変え深草團扇をどと賣る小経紀児ふ打扮て神會の本日京ふ赴ふ人家の簷下ふ立在そ種々の山鉾の渡るを親つ有りけるふ怪むべ〻業因が肚裏ふ聲あるて忽然として叫ぶと応聲ふ異ふ〳〵手来他が做ふ悪事を云云と喧ふ聲高ふして人の耳を串く可りふ成えべ業因ふ驚慌て腹を厭ー曾を拊く禁んと欲されども少く高く罵りて亮も寝とられるりーふ小嘍囉們も驚呆れて傍痛く恩の〻今ちーふせん術と知ぞ況その間近く聚合る衆人ふ迭ふ袖を被目を汪そ怪を怕れざるあるー浩処ふ室町家の市正高梨六郎左衛門尉職徳と唤做を武士ふ鋸捕使ふ大

將ふれば這日祇園會ふ西衆人取衆合ふ市中の非常と敎言んとそ。騎兵五六十名を従へ騎馬苛めく巡歴ふ吒咤の聲も暴ふ巷路〻〻と町人ふ竹杖を引鳴さー先を拂ーて来ふければ業因竝ふ小嘍囉們ふ齊一慌忙ふ快躯んと欲されども稠然とーて錐も沼立ふ人の山做ふ人ふ堰れて。進退便りを失ざりーふ業因が腹内ふその積悪を罵る上這時殊ふ甚ふ隠ふ〻くもあらざりーと職徳ふ聞くこれを听若且怪くその人を相るふ形貌ふ經紀児ふ似れども。その面魂檻檻児めふて腹内ふ聲あるとて或ふ名を告り或ふその積悪を罵るとの分明ふれば原来那奴ふ豫ふて。強盗但鳥跖ふらん兵毎逃ふる捕捕りねと馬上ふ劇ーふ下知ふ従ふ揣雄の黠兵數十名を来りぬと忽ち果ぶ〻ふ群ると捕稠て御諚ふと喚撕々〻三七二十一ふ競ひ鬼れる勢ひ免るべくもあらされば業因ふ吐嗟とだるふ殺脱んと欲されども。身ふ寸鐵を帯ざれば経紀人の店前ふ立。木葩の小杉木を引拔持く。當るふ儘ふて搏仆せ〻ヨヲ勢ふれば物ともせぬ前後左右ふ

○文溪堂藏

高梨職徳市ハ
但鳥業因と捕捕ふ

折累りく。矢場ふ組住り操伏せて。押へて索と撕ふけり。然が業因ふ從ひ來る。三四個の小嘍囉們も。六の折二人い搦捕られ辛くあく逃亡せ。只一人と雖えけり。是紀氏の恩聞ゆて。群集の男女逃迷ひ滾びて。人ふ踏るあり。婦幼い泣叫び。只蟇の子と散るが如く。走る迹へ又聚合ふ。鼎語ふ怖ーた。物欲親るる人心。老弱男女。堅貝不肖是ゆりの後日と歴るまで。這強人の噂とのみ。いも継ぎ。傳へ。奇談るぞといふ。唐山ゆい戰國の時。好て人肉を啖ひ。めあり。我神ゆい往古より。殘忍慘毒の猛者。うと。牛馬の肉まく。啖ふを稀る。ふ。但鳥業因ハ乃ち婦の胎と。奪ふて。ヨクくたの小兒と。啖ひ。表い。所云人面獸腹人。その惡虎狼ふ勝りる。天罰人怨共ふ報ひて。忽地腹内ふ聲あり。その積惡と。許く。緝捕の縄ふ繋れて。怕絆べ。誡むべ。と。堅表紀人ちふもありけり。畢竟業因が摘捕られて後の話説甚麽ぞや。そを次の巻ふ解分ると。聽れかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之三終